

のけがれも無し」と説かれる。また、「女は不浄やと、世上で言うけれども、何も、不浄なことありやせん。男も女も、寸分違わぬ神の子や。女というものは、子を宿さなきゃならん、一つの骨折りがあつて。女の月のものはな、花やで」という教祖の語りは、女性そのものの存在を全面的に肯定するものとなっている。それは、安産の守護が、単に子どもが無事に生まれることだけでなく、子を産んだ母が出産後に心身ともに健康で「常の通り」に過ごせるものであることを意味する。また、「をびや許し」が妊娠六カ月以降に頂くものであるから、「をびや許し」は「元はじまりの話」（人間創造の話）との関連で理解しやすい。

出産環境が著しく変化し、また、出産が病院で行われる現代にあつてもなお「安産」は人々の祈りである。生殖医療の技術の進展のなかでこそ、「いのちの原点」である妊娠・出産、その役割を担う女性の「いのち」について直視すべきであろう。出産にかかわる様々な習俗は、無事に子どもを産むということだけでなく、そのいのちの誕生が人間だけで為されるのではないことを知らしめ、妊産婦のいのちの安全や健全を願う祈ることが原点ではなかったのか。出産を血の汚れとして家族や家事から遠ざけた風習でさえ、それは産後女性の休息を保障するものであつたとも考えられている。

いのちの原点を示そうとする「をびや許し」は、現代社会におけるいのちのあり様を考えさせるものである。

くなり、生まれた子を「ベビー・ボックス」に遺棄するようになった。また医師の間からは、中絶取締の強化によって「先天性奇形児」の出産が急増したとの声が上がっている。

「入養特例法」は未婚母の妊娠中絶を防止し、養子縁組を推進するための施策であるが、今日に至って韓国政府が未婚母保護策を打ち出した理由として、出生率が世界最低に落ち込んでいく「低出産問題」が挙げられる。近年の韓国で出生率が低下の一途を辿る中、韓国政府は、高学歴の既婚女性もつと多くの子供を産んで、出生率が回復することを期待している。だが、晩婚・晩産化傾向にある高学歴夫婦は、七組に一組が不妊とされるほど出産力が低下している。そのような状況下で、未婚母の産む子が「低出産問題」解決の一助と認識されるようになった。また、近年韓国で国際結婚が増え「混血児」が増加する中、未婚母の子でも父母が韓国人であれば、韓民族の人口維持に貢献すると期待される。そうした今日の人口問題との関わりにおいて、未婚母保護策が講じられる一方で、政府の国益優先策を担うプロテスタントの児童福祉機関では、キリスト教宣教の名を借りて、国策の下に障害児の海外入養を続けているのが現状である。

「ベビー・ボックス」の是非をめぐる白熱した議論が続く中で、二〇一四年五月、同教会に続いて、大韓イエス教長老会セガナン教会（京畿道軍浦市）が「ベビー・ボックス」を設置し、同年八月までに一四人を受け入れている。韓国社会において「ベビー・ボックス」の法的・倫理的問題を問う声が絶えないものの、今日の韓国が抱えている「低出産問題」との関わり

韓国キリスト教界のプロライフ運動

——中絶の代案と子棄ての是非——

淵上 恭子

二〇〇九年二月、大韓イエス教長老会主サラン共同体教会（ソウル市冠岳区）の李鐘樂牧師が、未婚母の産んだ子や障害のある乳児等を匿名で預けることのできる「ベビー・ボックス」を設置した。ここに連れて来られた子は、二〇一〇年は四人、二〇一一年は三七人であった。ところが、二〇一二年に「入養（養子）特例法」が施行されて以降、「ベビー・ボックス」に遺棄される乳児が急増した（同年七九人、二〇一三年二五〇人）。同法は、産みの親が出生届を出せば子供の養子縁組ができることを定めたものであるが、未婚母に対する差別が残存する中、事実を隠そうとする女性達が「ベビー・ボックス」に乳児を遺棄している。また「ベビー・ボックス」への障害児の遺棄も多く、二〇一三年現在、二日に一人の割合で乳児が遺棄されている。「ベビー・ボックス」は、中絶の危機に瀕した子供の生命を救っている一方で、子棄てを助長しているという批判を免れないでいる。

「ベビー・ボックス」への乳児遺棄が急増した背景として、キリスト教界の中絶反対運動や政府による中絶取締りの強化によって、中絶がやりにくくなったことが考えられる。かつての韓国では、未婚母の子や障害胎児の中絶は容認されていたが、近年のキリスト教団体のプロライフ運動や、人口問題を憂う政府の思惑によりそれが困難になった。その結果、中国に行つて中絶する者が増えた一方で、経済力のない者は中絶ができな

において、「ベビー・ボックス」が、中絶反対と胎児の生命守護を唱える韓国のキリスト教界のプロライフ運動の、新たな争点として浮上してきていると考えられる。

『新女界』の思想——イデオロギーと残滓——

村山 由美

文化を担う主体としての民衆／国家の二項対立はすでに批判されており、構造主義・文化主義双方の視点においても、文化形成の過程にはさらに複雑な要素が関わってくることを前提とした理論形成がなされるようになった。宗教文化が構築されていく上でも、国家、権威としての教会、聖書、伝統、そして日本という場における民衆性など、多くの要素が複雑にかかわりあつて折衝している。そして、その舞台として、年齢や性別が異なる人びとが共に集うローカルな教会は独特な場を提供している。今日、近代日本におけるキリスト教の思想史、精神史などの歴史記述は、男性知識人の名前で満ちている。男性と同様に教会を支えたであろうクリスチャンの女性が、どのように生きてきたのか紐解く方法は、一つは、実際に生きたクリスチャン女性の生涯に寄り添って思想と行動を読み解くライフヒストリーという可能性が考えられるが、もう一つの可能性は雑誌、あるいは教会誌を史料とした歴史記述による、女性の生活と思想の再構築という方法がある。本研究は後者の方法によって、キリスト教精神史の中に同時代の女性たちを位置づけることが課題である。

弓町本郷教会は、一八八六年の創立にかかわり一八九七年